HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ナショナルな欲望の回帰 ： １９９０～２０００年代のロシア・ポストモダニズム文学の変容［全文の要約］
Author(s)	松下, 隆志
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第12042号
Issue Date	2015-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60491
Type	doctoral thesis
File Information	Takashi_Matsushita_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士論文要約

氏名：松下隆志

論文題目：「ナショナルな欲望の回帰：1990〜2000 年代のロシア・ポストモダニズム文学の変容」

本論文では、ソ連崩壊後の主として 1990〜2000 年代の現代ロシア文学の変容過程が、90 年代ロシアで台頭した思想・文芸潮流である「ロシア・ポストモダニズム」のプリズムを通して考察される。ソ連崩壊により社会主義リアリズムという規範が失われた結果、90 年代のロシア文学ではポストモダニズムと総称される前衛的かつ実験的な文学が脚光を浴びたが、2000 年代に入るとポストモダニズムの勢いは翳り、若い世代の作家らを中心に再びリアリズム文学が勢いを盛り返した。こうした一連の流れは、単に流行の交替であるとか、急激な資本主義化を目指したエリツィン体制から社会的安定を重視するプーチン体制への移行といった、ロシア社会自体の変化の結果として説明されることが多かった。それに対して、本論文はこのような外在的要因ではなく、ロシア・ポストモダニズムというディスクール自体に含まれる内在的要因から、ソ連崩壊後の現代ロシア文学の変容過程の解明を試みる。分析対象としては主としてロシア・ポストモダニズムに関連づけられる批評家・思想家らの論考および具体的な文学作品を扱い、映画・哲学・社会科学・精神分析といった他領域ともクロスオーバーさせながら、多角的な考察を行っている。

序論「「ロシア・ポストモダニズム」というパラドックス」では、1990 年代前半のロシアで台頭したロシア・ポストモダニズムのディスクールが批判的に検討される。そもそもポストモダニズムはモダニズムの凋落や高度な資本主義の発展を背景として 70〜80 年代に欧米を中心に流行した思想潮流であるが、社会主義体制下で経済や文化が統制されていた同時代のロシア（ソ連）にそれを当てはめることは決して自明なことではなかった。90 年代当時の新進気鋭な批評家ら（B・グロイス、M・リポヴェツキー、M・エプシテインなど）は社会主義リアリズムをモダニズムの継続と、ソ連社会をイデオロギー的な記号の集積としての「シミュレーション」社会と解釈するなど、文化の思い切った再コンテクスト化を行うことで、「ロシア・ポストモダニズム」という、欧米のポストモダニズムとは似て非なるディスクールを構築した。しかし同時に、そうした再コンテクスト化戦略の代償として、ロシア・ポストモダニズムは欧米のポストモダニズムとの差異をナショナルな特質としてディスクールの内部に抱え込むことになった。

本論文は三部構成であり、第一部「ディスクールの変容」は、1990〜2000 年代にかけて

のロシア・ポストモダニズムのディスクールの変容過程に焦点を当てて分析を行う。

第一章「メタナラティヴとしての「空虚」」は、ロシア・ポストモダニズムのディスクールにおいて一種のメタナラティヴとして機能していた「空虚」の概念について論じる。しばしばロシア・ポストモダニズムの源流と見なされるソ連非公式芸術サークル「モスクワ・コンセプチュアリズム」において、空虚は、無であると同時に充実であるといったアンビヴァレントな性質を持つ概念として語られる傾向があった。空虚の形而上学的性格は何よりもまず後期ソ連社会の特殊性によって担保されていたが、ロシア・ポストモダニズムの批評家は空虚の概念をソ連崩壊後も引き継ぎ、それをソ連以前／以後のロシアの「本質」として提示した。しかしながら、90 年代末には空虚のこうした形而上学性は資本主義のシミュレーション性に取って代わられることになる。本章では、こうしたプロセスを、主として作家Ｖ・ペレーヴィンの 90 年代の代表作（『オモン・ラー』、『チャパーエフと空虚』、『ジェネレーション P』）とロシア・ポストモダニズムのディスクールとを比較分析する形で検討している。

第二章「交叉する二つの自由 : 臨界点としての 1999 年」は、現代ロシア文学における「自由」に対する捉え方の変遷を分析している。欧米のリベラルな国家と異なり、共産党による一党独裁が続いたソ連において自由は既得ではなく、常に探求されるべきものだった。とりわけ、ロシア・ポストモダニズムの作家たちは「あらゆるディスクールからの解放」という徹底した要求を掲げたが、その結果、自由を求める主体自身が自由から疎外されるというジレンマに陥った。ソ連崩壊後、こうした「解放」としての自由は解放されるべき対象を喪失し、代わって資本主義とともに流入してきた欧米的な自由がロシアで優勢となる。しかし、2000 年代に入って欧米的な自由が一種の「イデオロギー」として感じられるようになると、今度は欧米的な自由からの「解放」としてロシア・ポストモダニズム的な自由が勢いを盛り返すようになった。本章では、1999 年をこうしたプロセスのターニングポイントとして設定し、同年に発表された二作品（Ｖ・ソローキン『青い脂』、Ｍ・ブートフ『自由』）に描かれた対照的な自由の在り方を中心に分析を行っている。

第三章「アイロニーの終焉 : ポストソ連ロシアにおけるチェチェン戦争表象」では、現代ロシアの戦争文学・映画に現れたアイロニーにスポットを当て、ロシア・ポストモダニズム退潮の要因の一つとして挙げられた「アイロニーの終焉」（Ｖ・クーリツィン）のプロセスを具体的に検討している。第一次チェチェン戦争を題材にした 90 年代の文学・映画作品では、ロシア古典におけるカフカス・イメージにアイロニカルな改変を加えることでヒューマニスティックなメッセージを打ち出す作品が目立った（作家 Ｖ・マカーニン『カフカスの捕虜』と映画監督Ｓ・ボドロフによる「二つのカフカスの虜」）。それに対し、第二次チェチェン戦争を題材とする 2000 年代の作品では、「敵」に対するネガティブな感情に

基づく大衆の欲望を肯定する都合のいい手法としてアイロニーが機能した（A・バラバーノフ監督映画『チェチェン・ウォー』）。その一方で、2000 年代半ばに頭角を現した若手作家たちは、既存の神話をアイロニカルに語り直すことを拒み、戦争という「現実」を語る物語の不在や、一貫した語りの不可能性を強調した（Z・プリレーピン『病理』、G・サドゥラーエフ『ツバメ一羽で春は来ない』）。

第二部「欲望の回帰」は、2000 年代の現代ロシア文学作品を中心に検討し、ロシア・ポストモダニズムのディスクールが抱えていたナショナルな特質が新世紀のロシア文学に回帰していく過程を、ロシア的・ソ連的両面から考察している。

第四章「身体なき魂の帝国：マムレーエフの創作における「我」の変形」は、ロシア・ポストモダニズムの重要な先駆者の一人として位置づけられる作家 Yu・マムレーエフの思想的・文学的転向を扱っている。1960～70 年代のモスクワでアンダーグラウンド作家と活躍したマムレーエフは欧米への亡命を経てソ連崩壊後いち早く帰国した。その過程で彼の「我」をめぐる独自の思想は独我論的な「我教」からインド哲学の超克、そして最終的に「永遠のロシア」と呼ばれるナショナルな思想へと変化していった。そこでは、ロシア・ポストモダニズムで重要な意味を担っていた「カオス」や「空虚」の概念がロシアの「本質」として提示され、堕落した西欧文明を救うロシアというメシアニズム的な考えが提示された。本章では、マムレーエフの主な哲学的著作である『存在の運命』および『永遠のロシア』を素材に彼の思想的変遷の過程を考察するとともに、その思想を文学作品として提示した『ロシアと差し向かいで』を分析し、そこにマムレーエフの創作の質的変化を読み取った。

第五章「幻想を超えた「現実」へ：「新しいリアリズム」とソ連表象」は、2000 年代にデビューしたロシアの若手作家たちを中心に見られたソ連回帰の傾向を扱う。00 年代に台頭した「新しいリアリズム」と呼ばれる潮流は 90 年代のポストモダニズムを否定したが、実際にはポストモダニズムの問題意識を色濃く引き継いだ上で超克しようとする運動であった。彼らはしばしばソ連体験こそ自分たちの「現実（リアル）」であるとし、ノスタルジーを超えた社会主義への強いシンパシーを表明したが（S・シャルグノフ、サドゥラーエフなど）、一方で彼らが描くソ連像には曖昧な点も見られた（プリレーピン『サニキャ』）。本章の後半では、ソローキンやマムレーエフの影響を強く受けた作家 M・エリザーロフの幻想的長編『図書館員』を取り上げ、そこに描かれた架空のソ連的世界を K・クラークの社会主義リアリズム論を援用しながら分析している。

第三部「欲望の解体」では、こうしたナショナルな回帰に対する批判的な検討が行われる。

第六章「ナショナルな欲望の再(脱)構築：ウラジーミル・ソローキンの 2000 年代の創作

をめぐって」では、ロシア・ポストモダニズムの中心的な作家であるソローキンの 2000 年代の創作が検討される。本章の前半では、00 年代前半の代表作である『氷三部作』を扱う。この大長編でソローキンはロシア・ポストモダニズムにとって重要な特徴であった空虚を独自の神話である「原初の光」によって克服することを目指したが、そこには宗教的な救済と同時に全体主義的な暴力も含まれていた。こうした根本的なアンビヴァレンスに基づく「再(脱)構築」的手法は、00 年代後半を代表する『親衛隊士の日』を初めとする一連の作品では、ロシアのナショナルな問題と結びつけられる形で展開された。そこでソローキンは、近未来に復活した架空のロシア帝国を舞台に、「ロシア」というナショナルな形象が実際には欧米や中国といった「他者」の存在抜きには成立し得ないのであり、一見すると真逆に思えるロシア的なものとソ連的なものとが多くの共通項を抱えていることを明らかにする。

第七章「ロシアという牢獄」は、本論文で扱ってきた問題を「欲望」の観点から捉え直し、現代ロシア文学の展望を提示する。本章では、フランスの文芸批評家 R・ジラールの欲望理論を援用し、ロシア・ポストモダニズムの欲望が欧米のポストモダニズムという媒介に刺激されて生じたものであり、2000 年代のロシア文学において表出したナショナルな要素（ロシア的なカオス、パラドックスなど）はそうした欲望の対蹠物だったことを示した。その意義は、西欧ポストモダニズムの諸テーゼを徹底的に突き詰めることによってその言説の矛盾を露わにし、西欧的な社会・文化システムに対する批判的な視座を提供したということにあるが、他方でそれは西欧文化の「陰画（ネガ）」としてしかロシアを語ることができないという限界性をも意味し、そのことは現代ロシア文学において「ロシアの牢獄」とでもいうべき状況を作り出した。本章では、こうした欲望の再生産を食い止めて「牢獄」から脱する試みをいくつかの文学作品（P・ペッペルシテイン『スワスチカとペンタゴン』、ソローキン『テルリア』）を例として示している。

結論では、以上の議論を踏まえ、ロシア・ポストモダニズムの文脈で見たソ連崩壊後の現代ロシア文学の変容過程を再度整理している。